



トピックス

- 酪農農家の共同体を拠点とする流域自給圏の形成
- 農を変えたい！全国集会in今治のご案内
- 若人が集う民間、地方自治体が協力した取り組み

www.ofrc.net

特定非営利活動法人
有機農業技術会議 事務局
発行責任者：藤田 正雄

酪農農家の共同体を拠点とする流域自給圏の形成

——木次乳業(有)創業者・佐藤忠吉さん——

昨年の夏、6、7年ぶりに奥出雲の木次(きすき)を訪れた。久しぶりに会った佐藤忠吉さんは、浅黒く日焼けしてますます冴えかえっていた。あとで室山農園を案内されてわかったのだが、忠吉さんの盟友であった田中利男さんの遺志を継ぎ、酷暑の中も時間があれば室山農園で畑仕事に精を出していたのだ。忠吉さんと田中利男さんの発案で、木次町が1999年に有機農業・健康農業推進の拠点として寺領地区宇山に開設したシンボル農園「食の杜」の一角に、「障害者の働ける場、都市生活者が農業を知り、体験できる農園づくり」をめざし、農業者だけでなく医師、大学教員、福祉関係者、乳業関係者など、15人の出資者を得て、1.5haの土地を買い取った。田中利男さんはこの地で「茗荷村」(知的障害児教育に40年間打ち込んだ田中一二の理想とする共生の村)を実現せんと、室山農園の代表となり、農業体験や就農希望者の受け入れ、無農薬・有機栽培の農産物の栽培・販売など、運営の中心となってきた。ところが、田中利男さんは道半ばにして病に倒れてしまった。忠吉さんは田中利男さんの夢を引き継ぎ、90歳近い高齢にもかかわらず、いまでも

榊湯俊子(淑徳大学教員)

「生涯現役」で「百姓」を貫いているのである。

「百姓の長男」であった忠吉さんは、尋常高等小学校卒業後に農業を継いだ。応召によって従軍したが、病弱であった忠吉さんは体をこわして復員し、4年間の闘病生活を送った。1953年、病床にあった頃から考えをあたためていた乳牛の飼育を始めた。その頃、奥出雲地域の生業であった養蚕、和牛(繁殖牛)、炭焼きが衰退しつつあり、現金収入源となる副業の導入が急務であった。まもなく酪農農家も含め同志6人で牛乳処理販売を開始し、1962年に木次乳業有限会社を創立した。

1969年、木次乳業の経営が出資者のひとりであった忠吉さんに全面的に委ねられることになった。ちょうどこの頃、酪農の現場では、農薬・化学肥料の使用が原因とみられる乳牛の異変や疾病が現れた。その当時は木次町でも、進取の気性に富んだ酪農家は、



佐藤忠吉さん

ご案内

第4回 農を変えたい！全国集会in今治

有機農業をはじめよう！（参入促進分科会）

農を変えたい！全国集会in今治のなかで、「有機農業をはじめよう！」と題した分科会が企画されています。有機農業をはじめめるための心構えは？はじめた後にはどのような問題があるのか？慣行栽培から転換するには？様々な角度から、有機農業をはじめめるためのヒントをご提供できればと考えております。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

開催日 2009年2月28日(土) 15:00~17:50
場 所 テクスポート今治 中ホール(愛媛県今治市)
参加費 集会全体で2,000円(学生1,000円)
申込先 農を変えたい！全国集会in今治四国実行委員会
E-mail nourin@imabari-city.jp
TEL 0898-36-1542
FAX 0898-36-5266

15:00 基調報告「土佐自然塾の人づくり」
山下一穂氏(土佐自然塾塾長 有機農業技術会議理事)
15:15 参入促進フォーラム
コーディネーター：大津清次氏(無茶々園専務理事)
コメンテーター：西村和雄氏(有機農業技術会議代表)
大学生による研究発表・ディスカッション
17:20 有機農業生産者懇話会との懇談
※会場の生産者との意見交換

この他、集会では様々な催しを企画しております。詳しくは農を変えたい！全国運動ウェブサイト nou-wo-kaetai.net をご覧ください。

「近代農業の尖兵」として「得々として」農薬・化学肥料に依存した農業へと転換した時代であった。忠吉さんや故大坂貞利さん（1993年に事故死）らはそうした現実を重く受け止め、1972年に「木次有機農業研究会」を発足させた。またこの頃、北欧の酪農思想に出会い、家族労働を軸にした「小農複合経営」の「酪農農家」を目指し、「人様の口に届ける食べもの」としての牛乳の質の向上を徹底して追求したのである。ここに、木次乳業のパスチャライズ牛乳の開発の原点がある。

1975年から木次乳業は本格的にパスチャライズ牛乳の開発に着手する。提携する消費者団体（京都の「使い捨て時代を考える会」）と共同してパスチャライズ牛乳開発の実験に取り組み、1979年頃には65℃・30分の低温殺菌処理の方法が軌道に乗り、地元の学校給食にもパスチャライズ牛乳の供給を開始した。

パスチャライズ牛乳の開発に続き、木次乳業は余剰乳を利用した乳加工品の開発に積極的に取り組んでいく。自然の状態により近いナチュラルチーズの試作（「イズモ・ラ・ルーシュ」の名称で1982年販売開始）や、スーパープレミアム（最高級）・アイスクリーム（「マリアージュ」）のJA雲南との共同開発・製造開始（1995年）などである。これら乳加工品

の生産加工施設建設の主体は木次町酪農生産組合（のちに農事組合法人）であり、木次乳業は技術者を加工施設に派遣して生産するという形態をとっている。

また、忠吉さんはブラウンスイス種（乳肉兼用種）を導入し、大坂貞利さんらと「日登牧場」で高齢者や障害者、女性でもできる山地酪農にも取り組んだ。このほか、放牧・草多投型養豚や平飼い養鶏、無農薬ブドウ栽培などに取り組む農家の経営の確立を促し、無農薬ブドウのワインや平飼い有精卵、卵油など、新しい地域の産物を創意工夫して、提携する消費者グループや生協、自然食品店、百貨店などに販売している。

木次乳業の創業者・佐藤忠吉さんと周辺の酪農農家や有機農業農家、養鶏農家、ブドウ栽培農家、さらに小規模の食品製造・加工事業体（企業）とは、同じ理念を追求する「同志」の関係にあり、それぞれに「自立した個」が「ゆるやかに連携」している。そして、これらと提携する消費者や流通組織のネットワークの拠点として木次乳業が存在しているのである。

[参考文献]

榎湯俊子,2008『有機農業運動の展開と〈提携〉のネットワーク』新曜社。

森まゆみ,2007『自主独立農民という仕事』バジリコ。

若人が集う民間、地方自治体が協力した取り組み

昨年10月に開催した第5回公開セミナー「有機農業大学講座in島根・浜田」にて発表された、島根県浜田市の佐々木一郎さんが代表をされている「いわみ地方有機野菜の会」は、ハウレンソウ、オクラなどの施設野菜を栽培する11名の若い農家で構成されています。有機JASの認証を取得し、県内外の生協、スーパー、自然食品専門店などに出荷しています。佐藤忠吉さんの存在は、農業を通して地域の自立を目指す佐々木さんにとって、手本であり、精神的な支柱だそうです。

佐藤さんが始められた時代とは異なり、島根県および浜田市の農業担当職員から、土づくり、病害虫防除などの技術から販売・流通にいたる幅広い支援を受け

て、実施規模を拡大しています。また、県の補助事業を活用してビニールハウスの建設などを行っています。さらに、有機野菜の会で研修を受けた新規就農希望者には、農地の確保、資金の調達など就農初期の困難を克服できるように、県および市の農業担当職員が相談に乗っています。このように島根県には、民間、地方自治体が協力し有機農業に取り組んでいる型があります。



佐々木一郎さん

賛助会員募集のご案内

有機農業技術会議では、当会議の趣旨に賛同してくださる方を対象に賛助会員制度を設けております。会員の方々へは、電子メールによる機関誌や研究会などのご案内、研究会・研修会などへの割引参加、総合研究会への参加、ご意見・ご要望の反映などのサービスもあります。この機会に是非お申込みください。

お申し込みは技術会議事務局にご連絡ください。また当会議ウェブサイトwww.ofrc.netのホーム→入会案内からも用紙がダウンロードできます。皆様のご入会をお待ちしております。

NPO法人

有機農業技術会議事務局

〒390-1401

長野県東筑摩郡波田町5632

（財）自然農法国際研究

開発センター

農業試験場内

FAX:0263-92-6808

E-mail: office@ofrc.net

Website: www.ofrc.net